フィールドで考える

舞台で学べ ——仮面舞踊修行の日々

吉田ゆか子（民博 機関研究員）

フィールドで仮面舞踊を学ぶ

研究の対象にインドネシア・バリ島の仮面舞踊劇トペンを選んだわたしは、調査地に入ると、この演目への理解を深めるため、有名な演者の元でトペンの踊りを習い始めた。トペンは一般に中年以上の男性によって上演される。登場人物（大臣、王、村人など）は殆どが男役であり、男性演者の力強い身のこなしや声が見所のひとつである。またトペンは儀礼の一部として上演される。外国人の女であるわたしには縁遠い世界に思えた。練習場でひっそりとトペンを体験するつもりだったのであり、後に自分が方々に踊りに行く日々を送るとは考えてもいなかった。ここでは、わたしがトペンの上演活動に「巻き込まれる」過程で理解した、バリ芸能が育まれる磁場のようなものについて紹介したい。

上演の誘いは断るべからず

練習開始から一ヶ月半程で、「今度寺のお祭りがあるので一緒にトペンを踊らないか？」と、師匠から誘われた。まだ一曲分の振りをなんとか覚えた時期であり心底驚いたが、強く拒否する理由も見当たらず、参加することになった。生演奏の伴奏音楽、仮面、重い衣装、どれもが未体験の「ぶっつけ本番」であった。当日は、儀礼に集った沢山の参拝客の物珍しげな視線の前で、うろ覚えの振り付けをこなすのが精一杯であった。

その後もわたしは頻繁に寺院や民家の儀礼で踊った。自分から志願したことはじつは一度もなかったのだが、調査で知り合った演者たちに、上演に加わるよう次々と勧められたのだ。上達のためには本番の経験が重要だと彼らは熱心に語る。儀礼でトペンに参加する事は、神々への、そして儀礼を開催している共同体への奉仕となる。踊りを捧げることで、「タクスー」とよばれる芸の魅力を神から賜ることができるともいわれる。気後れするわたしに対し、親しい友人たちは異口同音に、上演の誘いは断るべからずと助言した。トペンは儀礼の度に必要とされるため上演頻度が高く、知り合いが増えるにつれわたしが踊る機会も増加していった。ちなみに神聖な「シダカルヤ」とよばれる役以外であれば、外国人や女性が加わることはほぼ問題にならなかった。

実際に、少数ながらトペン上演をおこなうバリ人女性がいることも知った。その多くは、歌舞劇アルジャや舞踊など他ジャンルで活躍する芸能家であり、仮面を試したい、父の芸を継ぎたい、男性舞踊に挑戦したいなどのさまざまな理由からトペンに参加していた。

もの言う観客

上演を重ねると、批評や助言が舞い込むようになった。外国人で女性なのにすごい！といったお褒めのことばもあったが、動作や衣装の細部についてまでじつに多くの意見が寄せられ、それはときに辛らつなものだった。芸能家もそうでない人もコメントしてきたが、バリでは演者がこうした批評から多くを学ぶ。なお、わたしの活動したギャニャール県は、芸能が盛んであり観客の目が肥えていることで知られる。手厳しい観客のコメントに泣かされもしたが、一方で、その観客は盛んにわたしが本番の舞台をふむようにたきつけ、わたしの踊りを歓迎するのだった。「昨日は我が家で踊ってくれてありがとう。うちのご祖先様たちも喜んでいたよ」などと言ってくれる。この飴とムチのはざまで苦悩しつつ、結局現在まで、わたしは時折上演に参加している。

芸を育む土壌

バリでは、子供の体つきや顔、興味の対象などを周りの大人がよく観察しており、「この子は踊りの才能がある」とか「演奏に向いていそう」といった話をする。才能ある事柄は、神から与えられた使命・仕事であり、適性を見出された人間は周りからその芸を学ぶよう勧められる。適性を見出し、芸を披露するよう奨励し、率直に批評する。これらの営みは、豊かなバリ芸能を育む土壌であろう。

正直なところ、わたしの小柄な体格も、あがり症の性格も、舞踊の勘の悪さも、トペンにまったく不向きであったが、調査をきっかけに、わたしは芸能を育むこれらの人びととの関係に取り込まれていった。「踊るか否か」「どう踊るのか」といった事は、やや大げさにいえば、わたしの個人的な趣味の範囲を超え、師匠や先輩演者や観客、そしてわたしがお世話になった土地の神様たちにも委ねられているように感じられた。であれば、調査の面でも演者ばかりを追っていてはバリの芸能文化の重要な部分を見落とすであろう。この経験は非・演者中心的な分析という、わたしの論文の視点にもつながっていった。

練習風景。練習仲間のデさんと師匠

道化の女に扮する筆者

上演中の筆者。老人の舞トペン・トゥア

上演後仮面を前に祈りをあげる演者